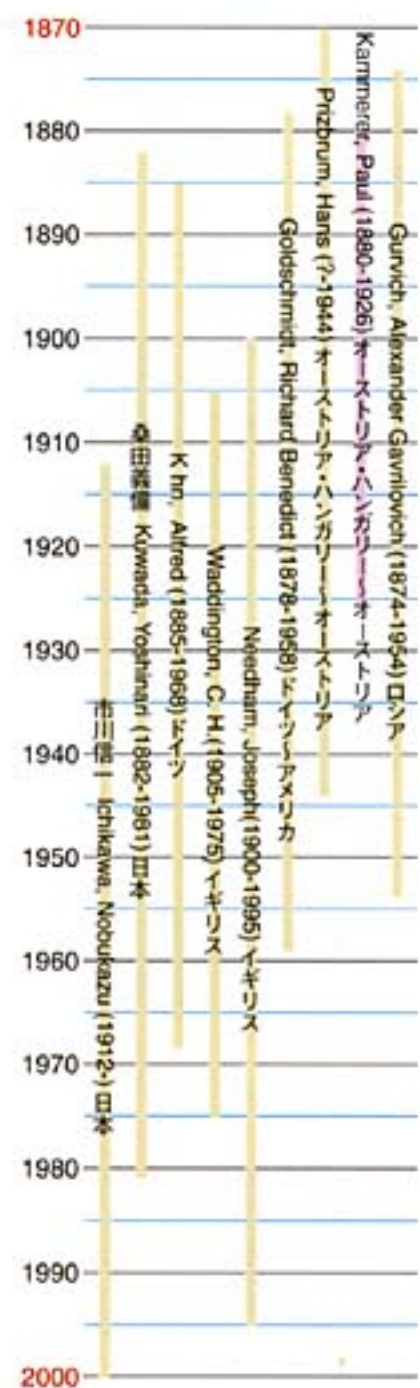


# 岡田節人の歴史放談③ 黄昏のウィーンの生物学 (承前) Paul Kammerer

当時のウィーンの風俗画。  
Soldier and a Young Girl Drinking New Wine, 1896(w/c on paper) by Felicien baron de Myrbach-Rheinfeld(b. 1853). Historisches Museum der Stadt, Vienna, Austria/Bridgeman Art Library/オリオンプレス



パウル・カンメラー  
1880年、ウィーン生まれ  
1926年、オーストリア山中で没す



パウル・カンメラー(K)は、1905年頃から20年代の初めにかけて、獲得された形質の存在を証明し得た、とするいくつかの例を発表した。たとえば、ウィーンの森にすむサラマンダーの体色と斑点のパターンが、黒土の上で育てると黄土の上で育てるとで著しく異なってきた、しかもその変化は多少とも次世代へ遺伝するとした。

とりわけて注目されたのは、アリテス(サンバガエル)という蛙の生殖様式を変える実験である。この蛙を強制的に水中で交尾させると、水中卵が得られ、しかもこうした卵から発生した雄蛙の前肢に婚姻瘤と称する隆起がつくられ、しかもそれは次世代に遺伝する、というのであった。

これらの報告は当然ながら、当時の生物学に衝撃を与えたものであった。しかし、それも長くは続かなかった。20年代になると、彼の結果はきびしい批判の対象となった。そして、彼の報告は間違った実験のやり方とか、誤った解釈とかを超えて、虚偽のものであった、という決着に至ったのであった。

彼は25年にはソ連のアカデミーから招聘を受け、モスコで研究室を開くべく準備を進めた。ソ連は、その国家的イデオロギーの見地から、Kの研究に深い関心をも



カンメラーは、サンバガエルを水中で交尾させると婚姻瘤がつくられ、この獲得された形質が遺伝すると、権威ある学術雑誌に発表した(Vererbung erzwungener Formveränderungen, I. Roux Arch. 1919, 45, 323-370)。その論文の写真は、古いプリントであり、判断に堪えるものでないが、中央のカエルの右の手のひらに、多少色の濃いふくらみがある。下はその顕微鏡用の切片。

っていたようであって、後年のルイセンコの台頭を予知させる。しかし、彼はモスコへ赴くことなく、26年9月23日、オーストリア山中でピストル自殺する。

Kの生きた時代のウィーンは、ほろびへの耽美の世界であった。音楽家出身の当代の人気学者であったKが、ウィーンの社交界の花形的存在であったことは当然だったろう。とりわけてウィーンは、かのシュニッツラーの書く甘美な恋ごとの世界であった。K——妻帯者であったが——もその世界で大いに名をはせた。当時のウィーンでバレダンサーとして人気の絶頂にあったグレーテ・ヴィゼンタール(注1)を熱愛し、並行してかのアルマ・マラー(注2、当時はグスタフ・マラーの未亡人)に死ぬほどの情熱を捧げた。毎日でも彼女と会うための口実として、研究所で彼の研究の手伝いをさせたのは事実らしい。ただし、彼女がどんな実験を手伝ったか、までは私の調査の届く範囲でなかった。

アルマ・マラーはウィーンの妖精とされ、彼女に心を捧げた天才たちのリストはめくるめくものだった。グスタフ・マラー(音楽)、グロピウス(建築)、クリムト(美術)、ココシュカ(美術)、ヴェルフェル(文筆)……などなど。Kもそのリストのなかの一人であったわけだが、上記の創造的大天才たちが芸術に残した不朽の名声に対比して、Kが科学の歴史に残したのはスキャンダルだけだった。これは爛熟、デカダンス、耽美の黄昏の時代に創造を生み出せない、という科学のなせるところか。

当時の生物学の先取りであった、ウィーンの実験生物学研究所は、30年代になると活動を低下させ、遂にはソ連の爆撃によって消失してしまう。創設者のプシブラムと夫人はナチスに拉致され、44年にテリージェンシュタットのユダヤ人収容所で亡くなったらしい。これが、黄昏のウィーンの生物学の、悲しき起承転結であった。

(おかだ・ときんど/JT生命誌研究館館長)

(注1)グレーテ・ヴィゼンタールは、ウィーン・オペラのバレ主任を経て、自らのダンス学校を主宰し、この時代、名声の絶頂にあったダンサーである。Kの数多くの女性遍歴のなかでも、もっとも重要な存在であったらしく、Kが結局ソ連からの招聘を断ったのは、彼女が同行を拒んだからだともいえる。シュレカーという同時代のおよそ耽美的な作風の作曲家がグレーテのダンスのために作った音楽、「風」は、異常というよりは異様な美しさにみちいて、この曲を捧げられた彼女のただならぬ魅力が伝わってくる。

(注2)アルマ・マラーについては、アルマ・マラー、石井宏訳『愛と苦悩の回想』(自伝)音楽之友社(1971)/フランソワーズ・ジルー、山口昌子訳『アルマ・マラー、ウィーン式恋愛術』河出書房新社(1989)/筆者近著『アルマ・マラーに恋した生物学者』哲学書房を参照されたい。